

乳幼児期の子どものインターネット・ゲーム利用（1）

—家庭における利用実態—

松 尾 由 美
桑 原 千 明

1. 乳幼児期のメディア利用と家庭での取り組みの現状

昨今、子どものスマホ等メディアへの依存による悪影響が議論されている。例えば、公益社団法人日本医師会と日本小児科医会は子どもたちのスマホ利用に関する啓発ポスターを作成し、過度のスマートフォンの使用が子どもの発達(睡眠時間、学力、脳機能、体力、視力、コミュニケーション能力)に悪影響を及ぼす可能性を警告している(毎日新聞 2017年2月15日記事)。

未就学児にとっても、スマートフォンやタブレット端末を通してインターネットやゲームを利用することは身近な活動である。ベネッセ教育総合研究所が2013年に実施した調査(ベネッセ教育総合研究所, 2014)によると、スマートフォンを日常的に利用している割合(ほとんど毎日、週に3~4日、週に1~2日と回答した割合の合計)は、0歳後半でも4%であり、3歳の30.1%をピークに、その後、4~6歳(4歳: 23.6%、5歳: 23.5%、6歳: 22.9%)では横ばい傾向にあることが示された。加えて、「ほとんど毎日」スマートフォンを利用している割合が最も高いのは2~3歳児であり、幼児以上に、乳児がスマートフォンを日常的に利用している姿が見取れる。同様にタブレット端末においても、スマートフォンよりも全体の利用率は低いものの、3歳(13.7%)をピークに利用者が増加し、4歳時点で一時減少(11.7%)、それ以降再び増加傾向(5歳: 12.8%、6歳: 13.0%)にあることが示された。一方で、据え置き型ゲーム機、携帯型ゲーム機では、年齢が上がるにつれて一貫して利用率が増加していく傾向があった。

スマートフォンやタブレット端末、ゲーム機が乳幼児にとって身近な存在であるにもかかわらず、家庭の中でどのようにメディアと乳幼児が付き合っていけばいいのか、保護者は手探り状態であるように見える。上述のベネッセ教育総合研究所の調査では、子どもがよく見たり使ったりするアプリやソフトを、保護者が選ぶ基準として、「子ども自身が気に入っている」と回答した割合(あてはまるとややあてはまると回答した合計)が84.6%と最も高く、次いで、子どもの年齢に合う(82.5%)、子どもにさせたい目的と合う(60.0%)と続いている。一方、製作者が信頼できる

(22.3%)、親向けに制作意図の説明がある(19.2%)、監修の先生がいる(8.7%)といったことを選択の基準にしている割合は低かった。利用する前に、子どもに与えるのに適しているのか、客観的な指標を用いて判断をしているというよりは、まずは子ども自身の選択に任せて利用させ、その様子を見ながら適しているか判断している姿が推察される。

また、上述のベネッセ教育総合研究所の調査では、家庭でのメディア利用のルールに関して尋ねている。全般的に年齢が上がるにつれてルールを設定していく傾向が示された。年齢が低いほど、テレビ番組、ビデオ・DVD視聴、スマートフォン利用ともに、特にルールを決めていないと回答する割合が高い。それと関連して、見方の約束が守れなかったら注意をするという割合は年齢が高くなるにつれて増加する。一方で、メディアによってルールを導入し始める年齢にばらつきも見られる。各メディアを週に1~2日以上使ったことのある子どもの保護者のうち、テレビ番組やビデオDVD視聴では3割以上が1歳児から利用時間の長さを決めている一方で、スマートフォンの利用時間の長さを決めている家庭は、1歳児では17.6%、2歳児では25.4%と少ない。以上の結果から、子どもがメディア利用を開始する当初からルールを設定するのではなく、子どもの利用状況や、子どもの年齢や発達段階を考慮しつつ、ある程度の年齢や状況に達したらルールを導入し守らせるという家庭が多いと考えられる。しかしルールの導入やメディアに関するしつけについて、保護者の多くは配偶者の意見(57.9%)、自分の経験(39.9%)、ママ友・先輩ママの意見(37.2%)を参考に判断しており、幼稚園の先生や保育士の意見(12.7%)、医師の意見(8.1%)、保健師の意見(7.6%)、医院・診療所などに貼られているポスター(6.2%)等、専門家の意見を参考にしている人は数少ない(ベネッセ教育総合研究所, 2014)。メディア利用のルール設定に対する判断も子どもに与えるメディアコンテンツと同様に、自身や周囲の人の経験則に基づいて、手探りで試しながら行っているものと想像できる。

子どものメディア利用に関する判断材料がない中で、保護者がそのための情報を欲していることを示す調査結果もある。第一子に未就学の子どもを持つ保護者を対象にした調査(子どもたちのインターネット利用について考える研究会, 2017)では、保護者は情報機器が及ぼす子どもの発達への悪影響の有無(54.7%)や子どもへの節度ある使わせ方のコツ(39.3%)に関して知りたい等、子どもとメディアの関係に対する関心は高いものの、実際にこのようなことを学ぶ機会に参加した経験がある者の割合は半数以下であることが示された。また、学ぶ機会を得た場合にも、「実行できそうにないルール作りが提案されていた」、「家庭での取り組みに役立つ具体的な情報に欠けていた」、「情報量が多くて読む気が起きなかった」といった評価から、

啓発活動で発信された情報がうまく家庭での取り組みに活用できていない現状があり、保護者が試行錯誤の中で子どもとメディアを関わらせざるを得ない実情が見て取れる。

以上の議論から、家庭で子どもにメディアに関するしつけをどのようにしたらよいのか、保護者の経験則ではなく、研究知見に基づく有効な方法を具体的に保護者に伝える必要があると考えられる。しかし、乳幼児期における家庭でのメディア利用に関するしつけに関する研究は数少ないのが現状である。

2. 子どものメディア利用への保護者の関わり方に関する先行研究

保護者が子どものメディアとの接触経験を制限したり、コントロールしたりするための取り組みのことは、**Parental Media Mediation**(親のメディア利用への介入行動)と呼ばれ、一般的に①積極的指導(**active mediation**)、②制限的指導(**restrictive mediation**)、③共視聴(**co-viewing**)/共利用(**co-using**)の3種類に分類される (Valkenburg et al., 1999)。①積極的指導とはメディアのコンテンツを子どもに説明したり、コンテンツに対する意見を伝えようとしたりする取り組みであり、一方、②制限的指導とはメディア使用量やコンテンツを制限する取り組みである。禁じられることで、禁止事項に対するより魅力が高まったり、保護者への反発が高まったりするため、年長の子どもにとって制限的指導よりも積極的指導の方が有効である可能性が示唆されている (松尾, 2013)。③共視聴/共使用とは、保護者が、子どもがメディアを利用している時にそばにいて一緒にメディアを視聴したり、利用したりすることである。

乳幼児の保護者を対象にしたメディア利用への介入行動に関する研究は数少なく、乳幼児の保護者がどのようにメディア利用への介入行動を行えばよいのか、また、介入行動が子どものメディア利用や発達にどのような効果があるのかについてはほとんど研究されていない (Piotrowski, 2017)。

そのような状況の中で、親のメディア利用への介入行動と子どものメディア利用との関連を検討した研究はいくつか存在する。Piotrowski (2017) が行った3~8歳の保護者を対象にした調査では、制限的指導がTVの視聴時間の減少と、積極的指導がTV視聴時間の増加と関連があることを示した。また、肯定的な影響を及ぼしうるメディアコンテンツに触れることを促す積極的指導がゲームの利用時間の増加と関連したが、制限的指導や悪影響を及ぼしうるコンテンツを避けるように促す積極的指導とゲームの利用時間との間には関連が見られなかった。また、テレビだけでなく、インターネットに接続する機器の利用に注目した調査も行われている。

Nikken & Schols (2015) は、オランダで 0~7 歳の子どもを持つ保護者 896 名を対象にオンライン調査を実施した。その結果、監督(子どものメディア利用を見守る等)、共使用、積極的指導、制限的指導、技術的制限(利用できるコンテンツを制限するためにあらかじめフィルタリングをかける等)のいずれも、教育ゲーム(例:教育的な算数や単語ゲーム、お絵かき、パズル)の利用頻度を高めるという正の相関関係があることが示された。また、技術的制限と、ソーシャルメディア(メールやチャット、ソーシャルメディア)の利用頻度との間にも有意な正の相関関係が示された。しかし、アクションゲームや、受動的な娯楽(YouTube 視聴等)のための利用頻度と介入行動との関連は見られなかった。さらに、共使用、積極的指導、制限的指導、技術的指導の頻度が多いほど、子どものメディアスキル(アプリを自分で始める方法を知っている、インターネットの中のあるウェブサイトを見つけられる等)が高いという正の関連も見られた。しかし Piotrowski (2017) も、Nikken & Schols (2015) も、1 時点の調査のため、親のメディア利用への介入行動が子どものメディア利用に影響を及ぼしたのか、子どものメディア利用が親のメディア利用への介入行動に影響を及ぼしたのか(すなわち、子どもがよくメディアを利用するのでメディア利用への介入行動を行わなければならなくなった)、因果関係の方向性は不明である。

因果関係を推定するために縦断調査を行った研究として、Hnatiuk et al. (2015) がある。生後 4 か月の乳児を持つ子どもの母親を対象に、15 か月間の間隔を空けて、2 回の縦断調査を行った。その結果、生後 4 か月時、19 か月時、両時点で子どもの TV 視聴を制限することに対して一貫して自己効力感が高い、もしくは 2 時点の間で自己効力感が上昇した場合、生後 19 か月時点での子どもの TV 視聴時間が短いという結果が見られた。

乳幼児の保護者のメディア利用への介入行動と子どものメディア利用との関連に関する研究知見は乏しく、また得られた結果も一貫していない状態であるように見える。さらに、発達段階別に有効な介入行動や、介入行動が子どもの発達に及ぼす影響について検討した研究は見当たらない。そのため、既存の研究成果をもとに、どのような保護者のメディア利用への介入行動が乳幼児に有効なのか発達段階に合わせて保護者に提言することは難しい。したがって、今後は、発達段階ごとに、どのようなメディア利用への介入行動が子どものメディア利用や発達に有効なのか、その因果関係を明らかにする研究を実施することが求められる。

3. 本報告の目的

保護者のメディア利用への介入行動が子どものメディア利用や発達に及ぼす影響を検討するためには、各発達段階に合った介入行動の調査項目を作成することが必要不可欠である。Chen et al. (2013) によれば、子どもの年齢によって、各項目への回答傾向が異なることが指摘されている。例えば、3~5歳の子どもを持つ保護者よりも、5~8歳の子どもを持つ保護者の方が、登場人物がすることがなぜ悪いのか指摘する頻度を多く回答する傾向にある。一方で、5~8歳の子どもを持つ保護者よりも、3~5歳の子どもを持つ保護者の方が、子どもが見ることのできるTV視聴量を制限する頻度を多く回答する傾向にあった。

加えて、昨今急速に普及が広まったタブレット端末や携帯型ゲーム機等、個人利用が前提であり、保護者は子どもが何をしているのか把握しにくく、介入しにくい。そのため、テレビやDVD・ビデオ視聴とは異なるインターネットやゲーム利用特有の課題や、介入行動があるのかどうかについても検討する必要がある。

したがって、各発達段階に適切な介入行動を明らかにするためには、保護者が乳幼児の子どものメディア、とりわけ、インターネットやゲーム利用に関してどのような困りごとを抱え、実際に家庭で子どものメディア利用に対してどのような取り組みを行っているのか、実態を把握した上で、乳幼児期特有の介入行動を洗い出すことが必要であろう。そこで本報告では、乳幼児の保護者を対象にした調査を実施し、乳幼児の保護者が抱える子どものインターネットやゲーム利用に関する困りごとやそれに伴う不安なことを明らかにした(本報告)上で、次の報告において(桑原・松尾, 2017)、このような困りごとに対して、家庭ではどのような取り組みを行っているのかその実態を明らかにしようとする。

4. 方法

(1) 調査対象者と手続き

2016年5月に群馬県内のこども園5園に通う子どもの保護者に、園を通じて調査用紙を配布した。278名(男性19名、女性251名、無記入8名)が回答した。回答者が回答した「調査用紙を持ち帰った子ども」の平均月齢は44.05か月であった。調査は無記名で行われ、調査への協力は任意であること、得られたデータは厳重に管理し研究目的以外の利用はしないこと、調査用紙への記入および提出により、本調査へのご協力に同意を得たものとするを、紙面にて説明した。

(2) 調査の内容

回答者の年齢、性別、子どもの数、調査用紙を持ち帰った子どもの月齢の他、子どものゲームやインターネット利用で困っていることや不安なことがあるか、あれば自由に記述するよう求めた。

5. 結果

(1) 子どものゲーム・インターネット利用に関する不安や困りごとの分類

調査用紙を持ち帰った子どものインターネットやゲームの利用で困っていることやそれに伴う不安なことに関する自由記述のうち、「ない」「特にない」「まだ使っていない」等困りごとや不安なことはないと回答したものを除いたのべ117件(1文が長い場合複数の文節に区切って分析単位にしたものも含む)を分析の対象とした。分析は、心理学を専門とする著者2名がKJ法を援用した方法を用いて行った。自由記述回答を分類した結果をTable1に示す。

(2) 乳幼児のゲーム・インターネット利用に関する不安や困りごとの現状

困りごと・不安の半数以上は、メディア依存に関するものであり、なかでも、長時間利用し続けてしまうことや、利用への衝動が高くいつでも利用したがることを挙げた回答が多かった。さらに、乳幼児においてもメディア利用に集中し過ぎている様子や、やめさせようとすると大泣きしたり不機嫌になったりするといった離脱症状、ゲームやインターネットに夢中になるあまり、食事や睡眠の時間が短くなるといった回答が見られた。離脱症状や、睡眠時間が短くなるといった他の活動との衝突はGriffith(1998)が指摘するインターネット依存の診断基準の一部に該当する。

次いで発達への影響を懸念する声が多く、とりわけ、視力の悪化を心配する声が多かった。視力発達への悪影響の懸念は子どもたちのインターネット利用について考える研究会が2016年に行った調査においても最も高く(59.2%)、保護者の心配の大きさがうかがえる(子どもたちのインターネット利用について考える研究会, 2017)。一方で、全体的な発達の遅れを心配する回答は4件見られたものの、日本医師会と日本小児科医会が悪影響を懸念している学力、脳機能、体力、コミュニケーション能力も含めた他の領域の発達への言及は見られず、悪影響を懸念する発達領域に偏りが見られた。

また全体からみると数は多くないものの(10.26%)、子どものメディア利用への介入行動に関する困りごとや不安についても言及が得られた。特にタブレット端末等タッチパネルで子どもが自由に触れている中で、意図せず不適切なウェブページに

乳幼児期の子どものインターネット・ゲーム利用（1）（松尾・桑原）

飛んでしまうことや、不適切な画像が子どもの目に触れてしまうことへの懸念や、静かにさせるために利用を許可しているという現時点での利用のさせ方が正しいのかどうか戸惑っている姿が見られた。また、具体的にどのようにメディア利用に関するルールや約束を子どもと設定したらよいのか悩んでいるという回答もわずか(3.42%)であるが見られた。

Table1 子どものインターネット・ゲーム利用に関する困りごとやそれに伴う不安の分類

カテゴリー	具体的記述	件数	割合(%)
A 依存		72	61.54
A-1	長時間利用 YouTube 等動画を見だすと際限なく見続ける	29	24.79
A-2	利用への衝動 スマートフォンを見つけると動画を見たいと言ってくる	23	19.66
A-3	没入(過集中) 声をかけても耳に入らず、夢中になっている	9	7.69
A-4	中止の困難 動画を見たがり、途中で終わりといってもなかなかやめない	8	6.84
A-5	離脱 やめさせようとする大泣きする。不機嫌になる。	3	2.56
B 発達への影響		16	13.68
B-1	視力 目が悪くなったりしないか心配です	12	10.26
B-2	発達 見過ぎると発達の遅れを心配しています	4	3.42
C 社会生活		12	10.26
C-1	友人関係 ゲームをもっている友達と話がつたわらないこと	7	5.98
C-2	生活の乱れ ゲームに夢中になって寝るのが遅くなったりしてしまう	3	2.56
C-3	きょうだい 姉妹で取りっこする	1	0.85
C-4	情動制御 一人でうまく操作ができず怒ってしまう	1	0.85
D 介入行動		12	10.26
D-1	利用の把握 見せたくない画像とかにとんでしまう。	5	4.27
D-2	ルール設定 どう時間を守らせるか。どう使い方について教えるか	4	3.42
D-3	利用状況 静かにしてほしい時など、使っていないよと言って与えてしまう	3	2.56
E 悪用の懸念		3	2.56
E-1	犯罪 詐欺など事件などに巻き込まれないか	2	1.71
E-2	課金 どんどん課金してしまいそうで心配	1	0.85
F 漠然とした不安	こんな時代になっていいのかなあ…と、考えさせられます	1	0.85
G その他	古い機種を購入したためプレイストア利用ができない	1	0.85
合計		117	100

6. 本調査のまとめと今後の課題

本調査の結果から、インターネット・ゲーム利用についてメディア依存に関する困りごとや不安を感じている乳幼児の保護者が圧倒的に多いものの、子どもへの介入行動については困りごととしてそれほど意識していないことが示唆された。ベネッセ教育総合研究所等これまでの調査結果と合わせて考えると、困りごとはあるものの、自身や周囲の人の経験に基づき、子どもの様子を見ながら試行錯誤で対応している様子が推測される。また、発達への悪影響も懸念しているものの、視力以外では具体的にどのような悪影響がありうるのか自体、想像することが難しいと考えられる。

どのようなメディア利用への介入行動が子どもの発達やメディア利用に有効であるのか、また各発達段階に適切な介入行動はどのようなものかを明らかにする研究が進むことで、これら保護者の困りごとや不安感を解決する手助けとなる情報を提供できるものと考えられる。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2014). 第1回乳幼児の親子のメディア活用調査報告書<
<http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4105>>(2017年3月30日)
- Chen, T-A., O'Connor, T. M., Hughes, S. O., Frankel, L., Baranowski, J., Mendoza, J. A., Thompson, D., & Baranowski, T. (2013). TV parenting practice: is the same scale appropriate for parents of children of different ages? *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, **10**:41.
- Griffiths, M. D. (1998). Internet addiction: does it really exist? In Gackenbach, J. (ed), *Psychology and the Internet*. New York: Academic Press, pp. 61-75.
- Hnatiuk, J. A., Salmon, J., Campbell, K.J., Ridgers, N. D., & Hesketh, K. D. (2015). Tracking of maternal self-efficacy for limiting young children's television viewing and associations with children's television viewing time: a longitudinal analysis over 15-month. *BMC Public Health*, **15**:517. <
<https://bmcpublihealth.biomedcentral.com/articles/10.1186/s12889-015-1858-3>>(2017年3月30日)
- 子どもたちのインターネット利用について考える研究会 (2017). 子どもたちのインターネット利用について考える研究会第八期報告書：低年齢の子どもとインタ

- ーネット< <http://www.child-safenet.jp/activity/2757/> > (2017年3月30日)
- 桑原千明・松尾由美 (2017). 乳幼児期の子どものインターネット・ゲーム利用(2) : 保護者の関わり状況 関東短期大学紀要, **59**, 22-29.
- 毎日新聞 (2017). スマホ警告ポスター「使うほど学力下がります」日医作製 2017年2月15日電子版 <<http://mainichi.jp/articles/20170216/k00/00m/040/043000c>> (2017年3月30日)
- 松尾由美(2013). 未就学児のインターネットメディア利用に保護者はどのようにかわったらよいのか? : 子どものメディア接触に対する保護者の指導方法に関する研究の現状と今後の課題 関東短期大学紀要, **56**, 61-70.
- Nikken, P. & Schols, M. (2015). How and Why Parents Guide the Media Use of Young Children. *Journal of Child and Family Studies*, **24**, 3423-3435.
- Piotrowski, J. T. (2017). The Parental Media Mediation Context of Young Children's Media Use. In R .Barr, D. N. Linebarger (eds.), *Media Exposure During Infancy and Early Childhood*. New York : Springer, pp.205-219.
- Valkenburg, P. M., Krcmar, M., Peeters, A. L., & Marseille, N. M. (1999). Developing A scale to assess three styles of television mediation: "instructive mediation," "restrictive mediation," and "social coviewing". *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, **43**, 52-66.